

## エビデンスに基づく教育指導の改善・充実

～令和6年度 全国学力・学習状況調査結果の分析より～

全国学力・学習状況調査の結果を最大限に活用するためには、データを分析し自校の子どもたちの強みや課題を客観的に把握することが大切です。

本号では全国学力・学習状況調査の結果を分析し、日々の指導改善・充実につなげている学校の取組を紹介します。

各校への聞き取り |

### ～大阪市立玉造小学校～

玉造小学校の森石校長先生は、平成20年度より全国学力・学習状況調査の結果分析に取り組んでおられます。そこで今回は、分析を始めたきっかけや分析方法、またその活用方法等についてインタビューを行いました。



大阪市立玉造小学校  
 森石 泰生 校長先生

#### 質問① なぜ、全国学力・学習状況調査の結果分析を始められたのですか？

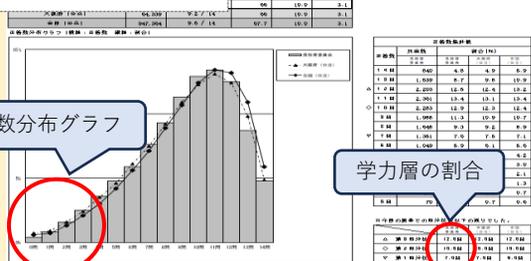
当時の所属校の校長先生から、全国学力・学習状況調査の結果分析を指示されたことがきっかけでした。調査結果を分析する中で、単に数値の結果だけではなく、自校の子どもたちの強みや課題が具体的に見えてきました。子どもたちの実態を、ぜひ教職員や保護者に知って欲しいという思いから毎年分析し、発信し続けています。

#### 質問② どのような分析をされていますか？

文部科学省より提供されている結果データを読み解き分析しています。

- 「01\_調査結果概況」では、正答数分布グラフや学力層（区分）の割合から学年全体の実態を把握しています。
- 「02\_問題別調査結果」では、全国や大阪市と自校との平均正答率の差を算出して、成果や課題のある分野や領域、設問を確認しています。無解答率が高い設問については、その理由について、難易度と関連付けて分析・解釈しています。

#### 01\_調査結果概況



#### 02\_問題別調査結果

○の部分特に  
 着目して分析を  
 されています。

※掲載しているデータは大阪市のものです

次ページに続く

## 「04\_回答結果集計（児童質問&lt;表&gt;）」

## 「05\_回答結果集計（児童質問&lt;グラフ&gt;）」

では、児童質問結果から子どもたちの生活や学習の実態を把握しています。

**経年的に分析を行うことで、調査対象の子どもが変わっても課題は変わらないことが分かり、学校の課題をより具体的に把握することができました。**



※掲載しているデータは大阪市のものです



**質問③ データを経年的に分析する重要性はどのような点にあると思いますか？**

**やはり自校の強みや課題がどこにあるのかを具体的に把握できることです。経年的に分析をすると、どの年度も継続して見られる課題が明らかになります。**例えば、漢字を書く問題が苦手なことや就寝時刻が遅くなる傾向がみられることなどがわかりました。全国学力・学習状況調査は小6が対象ではありますが、自校で学ぶ子どもたちのゴールの姿として、その実態と課題の改善策を教職員全体で共有する必要があります。そして何よりも、**今後の指導改善やその充実につなげて、エビデンスとして活用することが重要です。**



**質問④ 分析結果をどのように活用されていますか？**

例えば「01\_調査結果概況」の学力層に関するデータを活用して、学力に課題のある区分Ⅳの子どもたちを具体的にイメージして教職員と話をしています。「授業に集中することができていない」「文章をきちんと読むことができていない」など、**教職員と一緒に子どもの実態を具体的に把握し、またデータに立ち返ってどのような結果として表れているのかについて、データをもとに考察するようにしています。**

**分析結果は子どもたちの実態を把握するエビデンスとして、教職員に共有するようにしています。**次年度の研究テーマを決定したり、校内研修で協議を行ったりするときには、教職員がこのエビデンスを活用していました。単にデータを分析するだけではなく、**その分析をもとにみんなで考察することが大切だ**と思います。

また、**学校便りを通じて保護者に分析結果を周知し、課題改善に向けた家庭での働きかけのポイント等**を示すこともありました。保護者も具体的な子どもの姿が見えると喜んでいました。さらに学校協議会の際に地域の方々に伝えることで、地域の見守り活動のモチベーションの向上につながることもありました。



森石校長先生、本日は貴重なご意見をいただきありがとうございました!!

全国学力・学習状況調査の結果を経年的に分析し、成果を上げている学校に教育ブロック担当指導主事より、聞き取りを行いました。どのような取組が成果を上げることにつながったのでしょうか。



### 【小学校】

- A小 ベテラン教員から若手教員が同じ授業方法を実施できるよう**校内で共通理解**を図る。（授業構成や板書計画等）
- B小 校長経営戦略支援予算で全児童分のホワイトボードを購入し、授業で**考えの可視化や共有**に活用している。
- C小 **協働的な学びを取り入れた授業力の向上**を図るための、教員の意識改革とICT活用を推進する。
- D小 「教育DX」を鑑みて日頃よりICT機器を活用して、**データの収集・分析**を行い発表する学習活動の機会を設けている。

### 【中学校】

- E中 グループ学習を授業の中に必ず取り入れ、「**学び合い**」「**話し合い**」の活動を重点的に行った。
- F中 **文章を要約する取組**をしている。新聞記事1面を100字程度に要約したり、単元の終わりに単元内容を100字程度で要約したりする。
- G中 第3教育ブロックの取組である探究読解プロジェクトを活用し、家庭科の授業を中心に地域の企業をゲストティーチャーとして招き、**探究的な学習活動を実施**した。
- H中 地域コーディネーターや**学びサポーター**を活用して、定期テスト前や土曜学習会、懇談期間中の学習会を実施した。
- I中 **1人1台端末を活用**した自習学習を実施している。

## まとめ

成果を上げている学校の特徴として、次のことが挙げられます。

- ホワイトボードや一人一台端末など、教具を有効に活用しながら**協働的な学び**を進めている。
- 学校内で**指導力の向上のために**、支援チーム事業や授業方法の共通理解を図る場の設定など**学校総体で取組を進めている**。
- スクールアドバイザーや学びサポーター、地域ボランティアなど**外部人材と連携**を行いながら教育活動を進めている。
- 文章の要約など、「**書く力**」に**力点**を置いた取組を進めている。
- 探究的な学習活動**を推進している。

すべてを急に行うことは難しいですが、今行っていることを上記の視点で見たときに若干バージョンアップできるところから進めていくと、取り組めることが見えてくるかもしれません。

シンクタンク統括室では、学校でもデータ分析を行えるようにするために、様々な分析ツールを作成いたしました。「アンケートをとったけどもう少し掘り下げて分析してみたい」や、「定期テストと全国調査の成績の関係を調べてみたい」といった学校で持っているデータと文科省等から送られてくるデータを合わせて分析することも可能です。

シンクタンク通信でも紹介している分析も一部行えるツールとなっていますので、シンクタンク通信で興味を持たれた分析を学校でも行ってみたいはいかがでしょうか。ツールの使い方や分析方法についてのお問い合わせは大阪市総合教育センター調査分析グループまでお願いいたします。

◎分析ツールの格納場所は、SKIPポータルの書庫に格納しています。

教育委員会>総合教育センター>教育振興担当>調査分析グループ>分析ツール



## 分析ツールの紹介

### 基本統計量さん

データの大まかな基本情報を知るときに使うもの。平均値や標準偏差など、データの様子を知ることができます。

### クロス集計さん

### クロス集計さん ～平均編～

アンケート調査で、データを入れると自動的にクロス集計をすることができます。グラフも自動的に作成されるので、二つのアンケート項目に関連がみられるか視覚的に捉えることができます。また、別のタブで**二つのアンケート項目に関連が見られるか統計的に検定を行うカイ二乗検定**の結果を知ることができます。

さらに、平均編のツールでは、アンケート項目とテスト結果などのスコアに関連がみられるか視覚的に捉えることができます。

### カイ二乗検定さん

すでに、クロス集計ができているデータについて、統計的な結果を知ることができます。

### t 検定さん

平均値について、**二つのグループ**で差があるかどうかを統計的に確かめることができる分析です。また、**一つのグループ**において、**取組前と取組後**の平均値に差があるかどうかを分析することもできます。

### 分散分析さん

平均値について、**三つ以上のグループ**で差があるかどうかを統計的に確かめることができる分析です。

それぞれの分析ツールの具体的な操作方法については、各ツールに記載していますので、そちらをご覧ください。

## 編集後記

シンクタンク通信VOL.4では、学力向上への足掛かりについて取組を特集いたしました。学力向上は一朝一夕でできることではありません。子どもたちの実態を把握しながら、子どもたちにあった取組を効果的に行うことが大切です。子どもたちの実態把握や取組の成果を知るために、様々なデータを活用いただければありがたいです。「これまでこのやり方でうまくいったから、次もうまくいくはず」ではなく、「今、子どもたちの状況がこんな様子だから、こんな取組をすると効果的ではないか」と仮説を立てて実践し、その実践効果を確認することで、次につながる実践事例がたくさん生み出されると思います。これらの取組そのものが、子どもたちに求められている「探究的な学び」を教職員が行っていることになるかと思います。子どもたちと一緒に教職員の皆さまも「探究的な実践」にチャレンジしてみませんか。

